

宜野湾高校の生徒達へ（35）

2020.8.10

渡辺憲司氏(自由学園最高学部長)は、東日本大震災で卒業式が中止(2011)になった際、校長として生徒にメッセージを届けた。同氏は、現在のコロナ禍を受け、我々にエールを送っている(朝日新聞4/24:一部引用)。

未曾有の危機に直面し、今は子ども達、若者たちの命を守ることを最優先に考えざるを得ない。

学校には、教師がいて仲間が集う。心を通わせ、絆を結び、やさしさを学び、人として成長する。

単に学力をつけるだけではなく、**人間力を鍛える場**なのだ。

学校に行けなくなった今だからこそ、そのことを思い起こしてほしい。

残念だが、授業の再開を見通すのは容易ではない。みな、**自分たちの未来がどうなるか、不安**だろう。

普段なら「夢見る未来」で結構だ。だが、**今、問われているのは、未来をいかにつくりあげていくかだ。**

厳しい経験を通して、どんな大人になっていくかを考えてみよう。

ウィルスは肉体を、むしばむだけではない。**精神や心をも侵していく**。不安は、始まりに過ぎない。やがてそれは、他者への攻撃に向かう。そして差別や偏見に。それだけではない。自己の誇りや人間性も奪っていく。

だからこそ、**やさしさが必要だ**。目の前の人にやさしさを向けよ。

家庭でどんな役割を果たせるかを考えてみる。弟や妹の面倒をみよう。
家族のために食事をつくるのもいい。遠く離れて暮らす祖父母に手紙を書いてみるのは、どうだろうか。

やさしさは、やがて自らに返ってくる。



想像力を働かせよう。病気になってしまった人を排除するのではなく、

どんなに苦しんでいるかに思いをめぐらせる。

閉鎖的な考えを打ち破り、**危機を機会**ととらえ、**積極的に生きる**のだ。

時間はたっぷりある。運動部員なら、人混みを避け、一人でランニングをすることもできる。
集中して語学の勉強をするのも、今ならではだ。

日記をつけてみよう。パンデミックは、また起きるかもしれない。

困難な中で、どう生きたかを記録しよう。その誇りと警句を子どもたちに、**次の世代に語り継ぐ**のだ。

散歩に出よう。

これまで気に留めなかった雑草にも花が咲いている。

吹きすさぶ嵐の中で、懸命に、命をともしている。

『宜野湾高校の生徒達へ(34)』で、「新型コロナウイルスは誰でもかかる可能性があり、感染者をいかにサポートするかが大切だ」と述べた。上で取り上げた渡辺氏のメッセージにはそれに対する回答が含まれているように思える。すなわち、「目の前の人にやさしさを向けよ」、「想像力を働かせ、病気になってしまった人がどんなに苦しんでいるかに思いをめぐらせよう」である。

私は、校長としてコロナ禍の中、「生徒に何かしらのメッセージを送り、この難局を乗り越えなければいけない」と思っていた。そんな時、同氏が東日本大震災の際、生徒に届けたメッセージを目にしたのだった。

私たちは「目の前の人にやさしさを向け、想像力を働かせ、病気になってしまった人がどんなに苦しんでいるかに思いをめぐらせ、互いにサポートしていく」ことで、**我々の未来をつくりあげていく**ことができる。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎